

濁り色の水溢れつつ音もなく最上川辺に春は来にけり (R)

雪解け ●●●

冬の間、真っ白だった雪原は次第に土色に染まり、雪の下からはチヨロチヨロと水の音が聞こえます。太陽の力は偉大です。気温は高くなり、どんどん雪は消えて行きます。

大石田の最上川は、上流で雨が降ると一日遅れて水位が上がります。春先の最上川の川面はチヨコレートに似た茶褐色で、伝説に大亀がいると云う今宿の『へぐり』をうねり、川前の『亀井田橋』の下の岩場を渦巻き、巨大な鯉も波に巻くと云う大浦・駒籠の『コイ巻』を逆巻きながら最上溪谷へと流れていきます。見ていて怖くなるような、いつまで見ても飽きないような、癒されるような不思議な感覚になります。県民の母なる川も時には、情熱的に激しいさまをみせてくれます。

彼岸が近くなると、まだ一メートル以上ある雪の下の畑から葉の付いた白蕪を掘りだし、味噌味の漬物を作ります。「なでつかねように(雪崩に遭わないように)。」と味噌蕪を仏様に供えたり食べたりします。そして野菜を掘った畑の雪穴は次第に大きくなり、さらに黒い土を雪の上に撒けば、大急ぎで雪を融かします。間もなく始まる農作業の準備です。

●●●

蟄虫戸を啓く(すごもりのむしとをひらく)

3月5日～3月9日頃

残雪期に立木の根周りの雪が丸く消える。それを表す方言は絶対あると確信していた。ある発掘調査の折、村の古老から「それは『けま』だ。」と聞きつけた。漸く27年間探していた言葉に遭遇した。「消える」の方言は「ける」なので、字をあてれば「消間」。山形県版方言辞典にもない。(海藤忠男)

桃始めて笑う(ももはじめてわらう)

3月10日～3月14日頃

芽吹きの季節がやって来ました。ひな膳の中に昔から“くじら餅”があります。嫁に来た頃から、女三人(三代)で流れ作業で数日かけ蒸かしあげ、遠くにいる親戚に送るお菓子でした。今でも自分なりにアレンジし友人親戚に送ります。すぐ手に入れられる物ですが、できるだけ我が家の味を作っていきたいと思います。(き)

草葉虫蝶と化す(なむしちょうとかす)

3月15日～3月19日頃

落雁は現在お彼岸に白とピンクの対で供える位ですが、平成元年、蔵から子供や女性の好む花や食物、又それぞれの家紋の型枠が沢山見つけました。今のように原材料が豊富で和菓子洋菓子何でも食べられる時代とは違い、昭和30年頃までは、落雁が冠婚葬祭の代表的菓子としてよく食べられたようです。(U)



2015.3.14 大石田駅から葉山の方角

読書会だより⑮

大石田の啓蟄のころ

七十二候より

大石田町立図書館

鳥の鳴き声が聞こえてくる頃になりました。餌になる木の芽がふいてきたからでしょう。図書室の煙突の穴の外側に毎年小鳥が巣を作り、時々にぎやかに羽ばたき、「ピイチ、ピイチ、チ、チ、チ、チ」と鳴きだします。温かな気温にホッとしますが、寒の戻りで寒くなることも。彼岸入りと明けは荒れると云われます。